

福岡大学医学会
福岡市城南区七隈
福岡大学医学部内
印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10-15

福岡大学医学会ニュース

わが医学部の明日に 何を求めるか

医学部長 三好 萬佐行



立春にして、皆様方には御健勝のことと拝してあります。昨年末、菊池昌弘教授に替わり医学部長に就任致しました。浅学非才の身ですので、皆様方の格別御指導、御鞭撻を宜敷くお願い致します。私共の福大医学部も発足以来十六年を経ました。千名を超える卒業生が若手や中堅の国手としての地位を確保しつつあります。また、大学院が発足して十年、一六六名もの方々が学位を受けて、それぞ

れ専門分野で指導的活躍をしておられます。このように、私共の医学部にも新しい伝統が育ちつつあり、皆様方と共に大慶に存じております。今日の社会は医学部、および大学病院に対し厳しい要望をしております。医師過剰に伴う入学定員の削減、大学院の充実と国際的レベルの医療費の削減など、どの一つをとっても医学部や病院の財政運営を容易にしているとは異ならない事項ばかりです。この時期にあつて、私共の福大医学部および病院が生き残り発展する途を、現在の立場から再考しておかねばならないと思つております。先ず学生教育については、

あります学生の一般医学教育の効果を増すためにカリキュラムの改革を行いました。今春にはその教育を受けた第二回生が卒業します。新カリキュラムの滋味を十分に摂取して未来に望ましい医師に育つてくれる学生も多々ありますが、模擬試験の実力成績を見ましても、医学教育の最少限度の目標とも言える医師国家試験の合格すら寛東無の学生も数多く見られるようです。この現実を見ますと、私共の教育態勢の何処かを改善し、何かを強力にしなければならぬことは明白です。現行カリキュラムに沿つて考えただけでも、授業科目とその内容、試験方法と進級判定、学力差による学級編成の再考と教師の適正な配置の見直しなど多くの意見が出ています。優秀ではなくとも、順調な勉学の歩みが続ける学生集団が、スムーズに勉学が進められる環境を確保しなくてはなりません。そのために

は、何等かの事情で遅れが大きい学生や、意欲を失つてしまつた学生のために特別な手当が必要でありま

す。国際水準で、それも高いレベルで遂行されている研究を行い、その成果を著々と報じている私共の仲間もいます。そのような研究には格別の支援と援助が必要でありま

す。国際水準で、それも高いレベルで遂行されている研究を行い、その成果を著々と報じている私共の仲間もいます。そのような研究には格別の支援と援助が必要でありま

す。国際水準で、それも高いレベルで遂行されている研究を行い、その成果を著々と報じている私共の仲間もいます。そのような研究には格別の支援と援助が必要でありま

大学病院の医療のあり方

福岡大学病院院長 志村 秀彦



今年医療界にとつて厳しい年になりそうである。国民医療費は十八兆円を突破し、このまま行けば十五年後には四十五兆円に達するであろうと心配されている。特に高齢化に伴つて老人保険や国民保険の伸び率の上昇が目立ち、現在でも老人医療費が国民医療費の二五・四％に達してあり、遠からず保険財政の破綻を招くであろうと懸念されている。先に厚生省は国民医療費抑制本部を設置し医療費抑制

策を検討し、先ほど中間報告が出された。この内容は医療関係者にとつても極めて厳しくかつ深刻なものがあつた。それは老人医療のあり方、長期入院の是正、大学病院における医療と研修の見直し、患者サービスの向上などが骨子となつてゐる。この中で老人問題や患者サービスはともかくとして大学病院を楯玉にあつてゐるのが気にかかる。勿論反省せねばならぬ処も多いが、ただ医療費抑制策を盾に一つの方的に取り上げてゐるのとはどうかと思はれる。厚生省側の主な主張は「大学病院における診療が教育研究と渾然一体となつて行われているとすれば研究・教育の経費を保障で支拂うのは筋違いである。大学病院

の紹介制は出来ないので、臨床研修の改善と保険医の資格を臨床研修終了後に与えるようにしてはどうか。」と言つて提案である。これによつて患者の大学病院指向を抑えたり、研修医による無駄な検査や治療を抑えて医療費を抑制しようとする魂胆である。現在これらの問題について全国国立大学病院長会議や日本私立医科大学協会などで検討され、議論がなされてゐる。全国医大の目がこの一点に集中してゐるとしても過言ではない。

何故かこつと騒がねばならぬのか一般勤務医師にとつては奇異の念をもたれるかも知れないが、この裏に私立医科大学や大学病院の死活問題が含まれてゐると思はれる。それはあくまでも大学病院が最

高最善の治療を行う地域の中核医療センターとして地域医療の一端をになつてゐることであらう。教育研究においてもまた然り。大学病院のおかれた立場をよく認識して国民の期待にそむかないことであらう。大学病院に患者が集まるのも、地域医療計画策定による病床規制が医師過剰現象に拍車をかける懸念がある。事実国公立を通じて大学病院在籍医師数は年々約二千人宛増加し続けて、アルバイト先も次第に窮迫してゐると言われる。若い医師達が大学病院に溢れることは診療面でも助かるかも知れないがその処遇問題を誤ると第二の大学紛争に発展しかねないし、厚生省当局が指摘しているように検査づけや過剰診療傾向を増長しかねないであらう。

従つてこゝで一度原点にかへつて本来の姿勢をとりもどす努力が必要と思はれる。それはあくまでも大学病院が最

慰霊祭

第十四回福岡大学医学部解

設・器械）およびソフト（研究費、研究員など）の増設や改善が必要なものも多くあります。また教育・研究者としての社会的地位の昇進も意欲向上に大きな力となります。ウィルス学や分子生物学、あるいは細分化された専門内科学や臨床検査医学といった教育、研究、診療に跨がる講座あるいは研究センターの増設、およびそれらの大学院研究科での専攻科目の新設が話題にのぼつてゐるが、実現可能なところから実現したいと願つてゐます。医学部の中にあつて、常日頃考へておりました二、三の問題点を述べました。それぞれ、皆様方の御理解のために例を挙げましたが、具体的な実現は皆様方の御意見が第一です。また、その合意を得るのに長日時が必要なものもありま

す。国際水準で、それも高いレベルで遂行されている研究を行い、その成果を著々と報じている私共の仲間もいます。そのような研究には格別の支援と援助が必要でありま

す。国際水準で、それも高いレベルで遂行されている研究を行い、その成果を著々と報じている私共の仲間もいます。そのような研究には格別の支援と援助が必要でありま



自己紹介

昭和六十二年四月以降本学で昇格された教授、助教授の方に自己紹介をしていただきました。

小児科学教授

満留 昭久



昭和五〇年四月に小田教授と一緒に福岡大学に赴任し、医学部第一回生からの卒前、卒後教育にたずさわってきま

麻酔科学助教授

比嘉 和夫



昭和四〇年に九大医学部を卒業して小児科学教室に入局し、故山徳郎教授に臨床の手ほどきを受けた。その後合

昭和五十七年七月から一年間、アイオワ大学神経科の神経生理学に留学しました。とうとうこし畑の田舎で本当のアメリカを満喫して帰りました。木村教授のすばらしいアイデアとそれを研究の段階まで持ってくる方法を実際に経験したのは大きな収穫でした。

昭和四十八年に九大を卒業する時に研修をこなすか迷ったのですが、福岡大学に医学部が開設されたばかりだったので、新しい大学は魅力があると思い、研修の申込を第一内科村教授にお願いいたしました。当時は福岡大学病院が開設された直後でもあり、きわめて自由な雰囲気があった時期でしたので、麻酔科の見学を同時にさせてもらっていました。その後、奥村教授の許しを得て麻酔科に転科させていただきました。

昭和五十七年七月から一年間、アイオワ大学神経科の神経生理学に留学しました。とうとうこし畑の田舎で本当のアメリカを満喫して帰りました。木村教授のすばらしいアイデアとそれを研究の段階まで持ってくる方法を実際に経験したのは大きな収穫でした。

海外便り

留学雑感

Knowledge
heals

大島 一寛

昨年四月から一年間、Ann Arbor (The University of Michigan, Ann Arbor) に留学する機会を与えていただいた。前もって参加を表明していた project は、我々の仕事に直接関係のある大変興味深いものであったが、一方では、アメリカの臨床医学や、最新の医療を直接自分の目で確認したいという願望も大きく、結局二重を追うことになった。辛い実験は予想以上に順調に進み、後半の大部分を貴重な臨床研究にあてることができた。関係者の絶大な支援があったことであるが、充実した海外生活を送れたのも一つの理由

と、同伴した家族を通して社会や自然との関わり合いを多く持たせたことであろう。美しい五大湖や林檎の花(州花)、紅色のロビン(州鳥)コマドリも一人をこころよく歓迎してくれたかどうか、単身の留学ではマイナス20℃の世界は数倍厳しく感じられたに違いないと思っている。

アメリカ経済の心臓部とも言われるミシガン州は、自動車産業を中心とする豊かな経済力を背景に、いち早く高等教育を充実させ、日本から多くの留学生を受け入れて来たといわれる。本学でも、志村、高岸、檀、古川、黒田各教授、薬理の山田助教と多くの先生方がミシガンで研究生活を送られたと伺っている。大学については御存知の方も多いが、主な Profile をあげると、一八七一年の創立、二、六〇〇エーカー(一〇・五平方キロメートル)の広大な敷地に一九の学部、学生数約四万(うち大学院生と Post-doctoral fellowship が38%を占める)、図書六〇〇万部、年間予算総額九・五億ドル、(研究費一・五億ドル)といったところである。大学の Housing office は一、〇〇〇名の学生を収容する寮を運営しており、特に大学院生を中心とする世帯持ちには一六〇〇戸以上の Family housing が準備され、世界各国からの留学生にも便宜がはかられている。私達も広い快適なアパートに入居させてもらったが、その他にも国際会議が開催できる施設、コンツェルトホールやウィーンフィルがやってくる演奏会場、全米一を誇る一〇万人収容のフットボールスタジアムと設備の素晴らしいさを数えあげると、枚挙にいとまがない。

キャンパスの中央を占めるメディカルセンターは、公衆衛生、薬、歯、看護、社会福祉の六学部と、七つの附属病院、その他多数の研究施設が約三〇〇の建物で連結され、雇用者七、〇〇〇人という巨大なメディカルコンプレックスを形成している。古い Main Hospital は米国立大学附属病院としては来あるものの、最新の設備の新病院に移転したばかりであった。

私は前半をクレスゲ・リサーチ・ビルで過ごした。テーマは Collagen を内視鏡的に膀胱周囲に注入して膀胱尿逆流を防止しようというものである。臨床応用までには未だ多くの検討が必要であるが、現段階では70%の有効で、将来有望な治療法と考えている。実験には二年生の二人の医学生が参加してくれた。丁度基礎から臨床への多忙な移行期にあったが、互いにカバーしあい、夏休み中も与えられた役割をきちんと果たしてくれた。将来、外科系へ進みたいというジェイ君はメスを握るのが楽しそうだったし、電気工学を専攻したというジェームズ君は膀胱内圧や尿管の蠕動運動に目を輝やか

に、質問を連発して言葉の不安定な私を悩ませた。彼等の率直な対応には大変好感がもて、同時に積極性と責任感、知識欲など、すべての学生がそうではないにせよアメリカの医学生像を見たような気がする。

臨床系実験室であるこのテクニシャン達は臨床医の多忙さをよく知っているよう

で、よく協力してくれた。大呼吸が変だと言ったのは獣医が現われ、実験後の犬が肺炎らしいといったのは胸写を撮り、厳寒の朝の犬が死亡したから病理解剖の連絡がかかった。私は人間がここに入院しても多分大丈夫だろうと本気で思った位である。

臨床領域の研修は主として附属病院の一つであるモット小児病院で、小児泌尿器科手術を中心に行っていたが、ここでは形成外科の重要性を知らされた。その他、衝撃波による碎石術や腎移植術、日経経路することの少ない領域も幅広く見学した。

病院ではローテーションで回っている学生や、レジデントと接触する機会が多く、彼等を通して教育の現場も観察することが出来たが、基本は Man to Man の対話方式で、教科書やノートを患者の前で見るという光景には一度も遭遇しなかった。勿論学生が黙って語らず、教師が感情的に叱るといった風景もなかった。レジデントの五年間に亘る一貫した教育プログラムは素晴らしい程整備されている。

泌尿器科だけでも毎週四つのカンファレンスがあるが、土曜日には朝八時から外科系全体の講義、症例提示、合衆国内、カナダ、ヨーロッパから頻りに著明な教授がやって来て特別講演をやったり手術を供覧する。外科系全体で毎週四十のカンファレンスが開かれていることになるが、レジデント達は専門医試験の準備も兼ねて月一回クイズと称する簡単な試験も受けねばならず、のんびりした日本の研修医制度からは想像もつかない。

臨床、研究、教育、いずれを取っても豊富な設備と人材、それにこれらを能率的に動かすシステムにはただただ感心させられるが、"Every coin has two sides" の諺どおりアメリカの合理性の裏には悩みも多いようである。

新聞を注意して見ていると医療批判の記事が少なくない。患者の獲得競争も結構熾烈であるらしく、ある病院が患者サービスをヘリコプターを購入したら周囲がすべてこれに追随したとか、患者の為に称する無駄な設備投資をやめて、地域医療をもっと全体的に考えて再編し直そうとか、日本と同じような記事があるかと思えば、病院を早々に退院した患者がモーターで死亡したといった深刻な記事もあつた。"Day Surgery" で代表されるように術後早期家族に支えられて青白い心配そうな表情で退院してゆく姿を見ていると、ゆっくり養生して退院する日本の患者の方がはるかに幸せのようだ。こうしたアメリカの光と影の部分と同時に見ることが出来たのも留学の成果であろう。

「ミシガン大学のメディカルセンターは今日も "Knowledge heals" という自信にみちみちた宣伝文句をテレビに放映している」と思う。

NIHから

黒木 政秀

アメリカの NIH (National Institutes of Health: 国立保健または衛生研究所) に来て一年余りが経過しました。いくつかの意味でアメリカの医学研究の中心的存在である NIH は、留学先としてだけでなく、その付属施設や連日行われているセミナーの質と量などから、短期間の研修先としても魅力あると思いますので、その辺若手紹介しておきます。

NIH は道都ワシントン(ワシントン特別区と呼び、いずれの州にも属さない)の東半分を取り囲んでいるメリランド州に所属し、ベセスダ地区郊外にあって、ワシントンのダウンタウンから約十マイル(十六km)の地点に位置しています。三〇〇エーカーといいますが約四・四km四方の敷地に大小五十余りのビルが並んでいます。緑の多い丘陵地にスペースをとって建てられているため、学生の姿が見られないことを除けば、大学構内を思わせる雰囲気です。NIH は元々ニューヨークのスタテン島の海軍病院に一八八七年に設立された一研究室(衛生研究室)に端を発し、一八九一年からワシントンに、そして一九三八年から現在地に移り、今年が創立百周年目というところでいろいろ記念行事が行われています。日本でも NIH 同窓会が発足し同窓会名簿が発刊されたのもその一環です。

NIH は現在アメリカ厚生省の管轄下にあり、表に示したように十二の研究研究所(Institute)と二つの研究センター(Center)及びディビジョン(Division)から構成されています。総勢一四、〇〇〇人が働いており、有する研究者(現在日本から約三〇〇人)というところで十二の研究分野が推察されます。NIH はこの他十四階建てで五〇〇余りのベッドを有する病院(通称クリニカルセンター)があり、各研究所とタイアップした臨床研究の場となっており同時に、若い医学生、看護婦及びパラメディカルスタッフへ研修の場も提供しております。あくまでも研究目的の病院ですから、我々 NIH 職員も含めて一般患者が受診することはできず、紹介状に基づいて研究対象として適当かどうかの判断の上で入院が許可されています。一方、高血圧や糖尿病などを始め、多くの慢性疾患が普通の生活の下でコントロールできるようになった現在、外来患者も多く、年間一五〇、〇〇〇人が訪れているといわれています。

NIH で行われる研究に加えて NIH のもう一つの使命はアメリカ各地の大学や研究所及び病院で行われる研究をサポートすること、国



NATIONAL INSTITUTES OF HEALTH の全景

NATIONAL INSTITUTES OF HEALTH (NIH) の主な組織

Office of the Director (OD)
Institutes, Research Centers and Divisions
National Cancer Institute (NCI)
National Eye Institute (NEI)
National Heart, Lung, and Blood Institute (NHLBI)
National Institute of Allergy and Infectious Diseases (NIAID)
National Institute of Arthritis and Musculoskeletal and Skin Diseases (NIAMS)
National Institute of Child Health and Human Development (NICHD)
National Institute of Dental Research (NIDR)
National Institute of Diabetes and Digestive and Kidney Diseases (NIDDK)
National Institute of Environmental Health Sciences (NIEHS)
National Institute of General Medical Sciences (NIGMS)
National Institute of Neurological and Communicative Disorders and Stroke (NINCDS)
National Institute on Aging (NIA)
Warren Grant Magnuson Clinical Center (CC)
National Center for Nursing Research (NR)
John E. Fogarty International Center (FIC)
Division of Research Grants (DRG)
Division of Computer Research and Technology (DCRT)
Division of Research Resources (DRR)
Division of Research Services (DRS)
Division of Safety (DS)
Division of Engineering Services (DES)
National Library of Medicine (NLM)

(二頁よりつづ) 際的な医学研究の交流を計ることにある。日本の科研費に相当する国の医学関係の研究費(総額六十億ドル)がNIHグラントの名でNIHを通じて配分されるため、このグラントの獲得競争が毎年行われるわけだが、年間二、三〇〇に及ぶ申請が審査されるという。日本からも多くの留学者が全米各地の研究者が獲得したNIHグラントでのフェローとして活躍しているのはこの通りです。表に加えておきます。Forstary 国際センターや研究グラント事業部の役割が推察されると思えます。ちなみにNIH内の各研究室の研究進捗状況は、本部が依頼し、部外者を中心に十人余りで構成される委員会での審査(サイト・レビュー Site Review)と呼ばれ三年度に一度行われる。でチェックされ、それによって予算の

配分が行われるという。その当該年には各研究室とも非常に忙しくなると聞いています。その他NIHには世界最大の国立医学図書館が附設されており、三、五〇〇、〇〇〇に及ぶ主要な医学雑誌に掲載された研究内容を月刊で要約する例の Index Medicus を作成発刊している。勿論日常利用が利用するNIH図書館は別にあり、これも相当の大きさの規模で、今まで私が探した医学関係の雑誌や単行本で見当たらないものはありません。最後に、NIHの中の癌研究所(NCI)と、その中にある五つの Division (表の Division とは別の)

vision とは別の)の Division of Cancer Biology and Diagnosis (DCBD) に所属し、さらにその下にある十二の研究室のうちの Laboratory of Tumor Immunology and Biology (LTIB) で働いておられます。この研究室は現在モノクローナル抗体及び遺伝子クローニング技術を用いてヒト腫瘍関連抗原を中心に解析しており、クリニカルセンターとタイアップしたモノクローナル抗体の臨床応用(放射性同位元素を結合させて行う画像診断及び治療)まで手掛けておられます。総勢七十四名(ドクター四十三、テクニシャン二十五、秘書六)の大研究室で、日本からは現在一人ですが、フランス、イタリア、中国(本土)、インド、アルゼンチンなどからの研究者がいて国際色豊かな研究室です。

の下、このような研究室が大小三〇〇程あるわけですが、各研究室が主催し、NIHがスポンサーとなっているセミナーも研究室内の研究の成果に比例して多彩で、毎週送られてくるNIHの週間カレンダーによると多い時は八十近く、セミナーが組まれています。各分野の最先端のセミナーですので、短期間の研修にきている研究者の中にはそのスケジュールに好んでこのセミナーを取り入れておられる人も多いようです。研修や学会出張に限らず観光でもワシントンにいられたら是非一度NIHにも足を伸ばして下さい。

今年七月より、アイオワ大学の Dr. Jun Kimura, Dr. Thoru Yamada のもとで臨床神経生理学の勉強をさせていただいています。名前でおわかりのように、二人とも歴とした日本人です。アイオワ大学といっても言葉にはあまり苦労をしていない状態です。ただ医者になって当初に初めて臨床の場から離れた生活をしているので、何か拍子抜けしたような、何かに追われているような複雑な心境で毎日を送っています。

臨床神経生理学という何かが、神経科に所属して、脳波や節電図を自分で最初から、つまり電極装着から全てを行ない判定する仕事をしていました。日本と同じで毎日のようにカンファレンスがあり、その時間と検査の時間をコントロールすることが毎日の仕事になっていました。アイオワと言っても、日本では勿論のことアメリカでも知らない人が多い。田舎都市の「Out of bounds」というアメリカの映画でも田舎の代表として登場するような所です。そんな田舎の州だからかどうかわかりませんが、写真にあるように州のほとんどを力バーする医療圏で病院の屋上にはヘリコプターが二機常駐し、患者の収容に毎日のように発着しています。

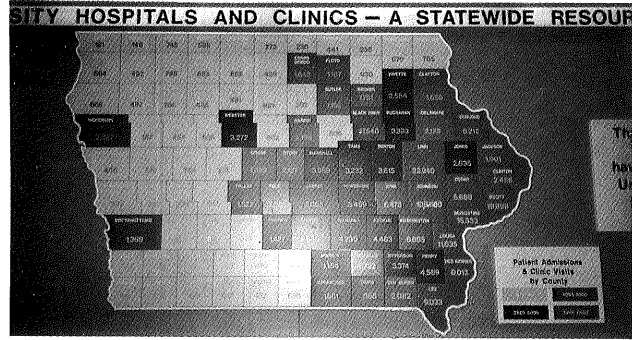
福岡大学も運動が活発ですが、こちらアイオワでは、アメリカンフットボール、バスケット、レスリングが有名で、今はアメリカンフットボールの時期で、Iowa Hawkeye は大学フットボールで上位にランキングされています。試合のある前日の金曜日はアイオワ近郊のモーターは満員で、アイオワ市の人口は急増し、六万人はいる状態です。スポーツ競技の入場料は、大学の重要な収入源になっているようです。

アイオワ市全体がほとんど大学構内と思われるほど市内の至る所に大学の学部があり、downtown に出ても学生が大学職員がほとんどいてよいほどの大学町です。今年は大統領選挙の年で現在予備選挙が行われていました。なぜか、こちらの人が聞いてもわからないのですが、その予備選挙の最初の投票がアイオワ州で、この表決が以後の選挙を左右するのでアイオワでも注目されています。

これから寒い寒い冬になり、マイナス10℃、マイナス20℃と経験したことのない気温になるので、暖かい福岡が恋しい今日このごろです。三、四年前、日本のドラマ「阿信」が中国で放映されました。深い興味を持って見ました。日本はどんな国か、日本人はどのように暮らしているのかと時々考えました。また、日本の医学雑誌をよく読みました。日本の医学現状を理解しました。習わなければならないところがあると感じました。ですから一年間一生懸命日本語を勉強しました。やっと国家海外留学の試験に合格しました。そして半年前日本国にきました。

福岡大学第二外科の構成は大塚教授の下、助教二名、講師三名、助手五名、医員三名、臨床大学院三名、研修医六名から成っている。このスタッフで診療、教育、研究に日夜努力している。教室の毎日は、朝八時二〇分の病棟当直報告から始まる。教室員全員が集まって、前日の当直医の報告を聞き、重症例については検討がなされる。月、水、金曜日は手術日である。更に土曜日は一週間の締めくくりとして、教授回診がある。

臨床および研究とも消化器グループ、呼吸器グループに別れて行われている。各グループとも別個に手術症例検討がある。臨床現場で起る問題点に耳を傾け、臨床家との共同研究に心がけ、常に病因の解明、治療に役立つことを念頭に置いて研究を進めています。医学部卒業後、基礎医学で勉強しようとする人は極めて少ない様ですが、いづれ臨床家になるにしても、若いうちに短期間でも基礎医学での研究に熱中する機会をつくることは、将来きつと役に立つものだと思います。この様な志を抱く若い学生と共に研究し、共に人生を語ることも私共の楽しみの一つです。(文責・内藤)



「外国人研究員として」 福岡大学第二外科 陳 烈 三、四年前、日本のドラマ「阿信」が中国で放映されました。深い興味を持って見ました。日本はどんな国か、日本人はどのように暮らしているのかと時々考えました。また、日本の医学雑誌をよく読みました。日本の医学現状を理解しました。習わなければならないところがあると感じました。ですから一年間一生懸命日本語を勉強しました。やっと国家海外留学の試験に合格しました。そして半年前日本国にきました。

福岡大学第二外科の構成は大塚教授の下、助教二名、講師三名、助手五名、医員三名、臨床大学院三名、研修医六名から成っている。このスタッフで診療、教育、研究に日夜努力している。教室の毎日は、朝八時二〇分の病棟当直報告から始まる。教室員全員が集まって、前日の当直医の報告を聞き、重症例については検討がなされる。月、水、金曜日は手術日である。更に土曜日は一週間の締めくくりとして、教授回診がある。

臨床および研究とも消化器グループ、呼吸器グループに別れて行われている。各グループとも別個に手術症例検討がある。臨床現場で起る問題点に耳を傾け、臨床家との共同研究に心がけ、常に病因の解明、治療に役立つことを念頭に置いて研究を進めています。医学部卒業後、基礎医学で勉強しようとする人は極めて少ない様ですが、いづれ臨床家になるにしても、若いうちに短期間でも基礎医学での研究に熱中する機会をつくることは、将来きつと役に立つものだと思います。この様な志を抱く若い学生と共に研究し、共に人生を語ることも私共の楽しみの一つです。(文責・内藤)

福岡大学第二外科の構成は大塚教授の下、助教二名、講師三名、助手五名、医員三名、臨床大学院三名、研修医六名から成っている。このスタッフで診療、教育、研究に日夜努力している。教室の毎日は、朝八時二〇分の病棟当直報告から始まる。教室員全員が集まって、前日の当直医の報告を聞き、重症例については検討がなされる。月、水、金曜日は手術日である。更に土曜日は一週間の締めくくりとして、教授回診がある。

臨床および研究とも消化器グループ、呼吸器グループに別れて行われている。各グループとも別個に手術症例検討がある。臨床現場で起る問題点に耳を傾け、臨床家との共同研究に心がけ、常に病因の解明、治療に役立つことを念頭に置いて研究を進めています。医学部卒業後、基礎医学で勉強しようとする人は極めて少ない様ですが、いづれ臨床家になるにしても、若いうちに短期間でも基礎医学での研究に熱中する機会をつくることは、将来きつと役に立つものだと思います。この様な志を抱く若い学生と共に研究し、共に人生を語ることも私共の楽しみの一つです。(文責・内藤)

教室紹介 福岡大学生理学第一

当教室は、今永一成教授、坂本康二助教授以下、助手二名、大学院生、研究生、教育技術職員各一名の少人数の研究室です。研究面では、細胞レベルから器官レベルまで広範囲な研究を行なっています。今永教授を中心とするグループは、心臓の生理的機能の解明、特に不整脈の発生、消滅のメカニズム、心筋障害と心筋保護のメカニズムに糖尿病や甲状腺機能亢進、低下時における心機能の変化など、心筋の病態生理を、単一筋細胞から器官としての心臓を対象とし、電気生理学的、細胞化学的に追究しています。一方坂本助教授は、泌尿器科の先生たちのお陰で私は日本の各地へ参加しました。このことは、私に日本民族を更に深く理解させてくれました。

関係があります。日本人の精神は偉大なのです。今後、両国人民健康の為、世界医学発展の為、もっと深い交流を期待しています。日本での楽しい生活はいつまでも私の記憶に残ることでしょう。

教室 便り

受賞

内藤 説也(内科学第二) 木村記念循環器財団研究助成金
研究業績「高安静脈炎の臨床的特徴と免疫遺伝学的相関についての研究」
黒木 求(生化学第二) 昭和62年度福岡県対がん協会がん研究助成金
研究業績「癌胎児性抗原(CEA)及αCEA 関連抗原(NCA)の遺伝子構造の比較解析」
古野 純典(公衆衛生学) 金原一郎研究交流助成金
第十一回国際疫学会議における学術交流に対して贈られた。

学術交流

昭和六十二年五月以降の海外留学又は海外出張者(ごき)のとおり。①研修先②目的③期間

海外留学

諸江 一男(内科学第二) ①アメリカ マイアミ心臓研究所②不整脈の電気生理学的研究③62・7・63・7
梅野 英輔(小児科学) ①Cardiovascular Research Institute, University of California, School of Medicine, San Francisco, U. S. A. ②小児呼吸器病③62・7・64・6
荒木 連雄(小児科学) ①Department of Thoracic Medicine, Royal Children's Hospital, University of Melbourne, Australia ②小児呼吸器病③62・4・63・3
井上 登生(小児科学) ①Institute of Psychiatry and Child Health,

海外出張

荒川規矩男(内科学第二) ①イタリー(ミラノ市)②国際高血圧学会組織委員会・欧州高血圧学会出席のため③62・6・11・6・18
西園 昌久(精神医学) ①アメリカ②The 140th Annual Meeting of the American Psychiatric Association 参加③62・5・25・5・14
西園 昌久(精神医学) ①韓国②The Korean Medical Assoc / WHO Joint Conference on Medical Education "Seminar on Changing Community Needs and Future Medical Education"に参加③62・6・25・6・28
西園 昌久(精神医学) ①アメリカ②International Psychiatric Association 参加③62・7・22・8・5
犬塚 貞光、前川 隆文(外科学第二) ①アメリカ②18th International Association of Enterostomal Therapy 出席のため(第18回国際人工肛門学会)③62・6・3・6・11
神代龍之介(外科学第二) ①アメリカ②研究打ち合せのため③62・7・26・8・2
利谷 昭治(皮膚科学) ①西ドイツ②17th World Congress of Dermatology ③62・5・23・6・14
利谷 昭治、林 紀孝(皮膚科学) ①中華人民共和国②第一回日本中国国際医真実学会③62・8・22・9・2
有吉朝美、大森 章男(泌尿器科学) ①アメリカ②第82回米国泌尿器科学会③62・5・17・5・26
大島 健司(眼科学) ①イスラエル②第五回ヨーロッパ眼内レンズ学会出席及び講演③62・9・11・9・27
林 英之(眼科学) ①アメリカ②眼内細胞増殖の実験的研究③62・10・30・11・29
井上 幹夫(健康心理学) ①米・シカゴ②Annual Meeting of the American Gastroenterological Association 出席③62・5・7・5・13
都 温彦(歯科口腔外科) ①アメリカ②米国の研究における歯・咀嚼の疫学的研究および歯科口腔外科臨床の現状視察③62・8・6・11・5
山田 英智(解剖学第二) ①アメリカ②エル大学客員教授③62・5・23・10・16
三好萬佐行(解剖学第二) ①オーストラリア②第11回国際リンパ管学会参加③62・9・20・9・30
松岡 雄治(生化学第二) ①アメリカ カナダ②NIH(NCI)③Seminar, 4th International Conference on Human Tumor Markers, 及④15th International Society for Oncodevelopmental Biology and Medicine 出席③62・8・20・9・5
古川 達雄、桂木 猛、山田 勝士、宮本 康嗣(薬理学) ①オーストラリア②

新刊紹介

関する研究(肺吸虫属の調査) ③62・7・10・8・22
Berndt Wowra ①西ドイツ・ハイデルベルク大学 脳神経外科講師 ②教育講演 "Technique, treatment-planning and therapeutic possibilities of stereotactic irradiation in brain tumors." ③62. 10. 23
許 徳清 ①中山医科大学孫逸仙記念病院皮膚科教授 ②中国におけるエリテマトーデス ③62. 5. 7
陳 烈 ①中華人民共和国天津医学院 泌尿器科主治医師 ②内視鏡的泌尿器科学の研究(福岡大学外国人研究員) ③62. 6. 20~63. 6. 19 (1年間)
金 基鈴 ①延世大学校医科大学 耳鼻咽喉科教授(韓国) ②第32回日本音声言語医学会出席 ③62. 10. 30~10. 31
金 光文 ①延生大学校医科大学永東 Sererance 病院 耳鼻咽喉科助教授 ②第32回日本音声言語医学会にて講演「温度感知器を利用した喉頭 Pace maker の実験的研究」 ③62. 10. 30~10. 31
ダイアン・M・プレス ①ウィスコンシン大学 言語病理学 ②第32回日本音声言語医学会にて発表「音声治療」 ③62. 10. 30~10. 31
張 昭明 ①私立中山医学院 耳鼻咽喉科(中華民国) ②第32回日本音声言語医学会にて発表「教師の音声問題」 ③62. 10. 30~10. 31
Dr. David Rampe ①Department of Physiology and Biophysics Baylor College of Medicine Houston U. S. A. ②共同実験の打ち合わせと準備 ③62. 9. 19~9. 26
K. A. Shakoor ①パキスタン国立小児病院 病理部助教授 ②小児悪性腫瘍の研究(特に免疫組織化学的検討について) ③62. 6. 17~8. 4
Ekkehard Grundmann ①Münster 大学教授 ②講演 "New aspects of lymph node metastasis." ③62. 9. 29
劉 宝宜 ①中国医科大学 病理学講師 ②留学(一年間) ③62. 10. 20~
Dr. Hans J. Müller-Eberhard ①Research Institute of Scripps Clinic CA. ②第24回補体シンポジウム講演及び教室視察 ③62. 7. 15~7. 18
Dr. Irma Gigli ①University of California, San Diego, CA. ②第24回補体シンポジウム講演及び教室視察 ③62. 7. 15~7. 18
安 允玉、金 勇一 ①ソウル医科大学疫学助教授 ②日韓癌共同研究の打ち合せ ③62. 7. 20~7. 22
李 家毅 ①中日友好医院 消化器内科医師 ②ビデオ内視鏡及び超音波穿刺術の研修 ③62. 5. 1
Professor Ta Jung Lin ①Mercer University School of Medicine産婦人科主任教授 ②無月経の POSによる解決法 ③62. 5. 15

来 訪

昭和62年 5月以降、本学医学部または病院を訪れた外国人学者はつぎのとおり ①所属 ②目的 ③来訪日

Ira D. Glick ①Professor of Psychiatry, The New York Hospital Cornell Medical Center. ②見学および講演 ③62. 5. 25
Irma Angelica Ruiz Ganoza ①ペルー ②研修 ③62. 6. 1~6. 5
徐 澄清 ①台湾大学医学部精神医学教室 ②見学および講演 ③62. 7. 20
Arnold M. Cooper ①Professor of Psychiatry, Associate Chairman for Education, The New York Hospital Cornell Medical Center. ②見学および講演 ③62. 9. 17
松元輝夫 ①ハーネマン大学 外科教授 ②アメリカにおける血管外科の進歩 ③62. 6. 5
浅倉稔生 ①ペンシルバニア大学 小児科教授 ②アメリカにおける小児エイズの現状 ③62. 7. 1

福岡大学医学会総会・例会の報告

日時 昭和62年 7月15日(水)
午後3時より

場所 福岡大学医学部臨床大講堂
第10回総会

議 事

1. 報告事項
 2. 役員改選
 3. 61年度会計報告ならびに62年度予算(案)
 4. 学外会費徴収の件について
 5. その他
- 第17回例会

- 講 演
1. 座 長 奥村 恂 教授
 2. 「西ドイツの大学町と学生たち」 病理学第二 田口 尚 助教授
 3. 「臨床薬理学をどうするか」 薬理学 古川 達雄 教授

編集後記

医学会ニュースの編集者も昨秋の学内人事で交代となったが、今回までは時間の関係でその多くを前任者にお預けした。ニュースの初版は新医学部長と病院長の新しい時代への所信表明で飾ることができた。これからも従来通りニュースの面を主体に載せていきたい。加えて最近が医学部にも増えつつある外国からの留学生、国内留学生が福大をどの様にみているか、その忌憚のない声なども掲載して行くつもりである。(G.T記)